



「しゃぼん玉」のメロディーにあわせてしゃぼん玉が舞う(写真提供:神谷徹さん)

楽器というのは、音楽に見えて物理ですね

ストロー笛開発・演奏のパイオニア

牛乳やジュースを飲むときに、何気なく使っているプラスチック製のストロー。円筒形であることは変わらないが、細いものや太いもの、先端がスプーンの形をしていたり、じゃばらのようにぎざぎざが付いていて曲がるものなど、さまざまなデザインがあり、色彩もカラフルだ。

このストローを加工して作った楽器「ストロー笛」を使い、いろんな曲を演奏して国内外の注目を集めているのが、ストロー笛奏者の神谷徹さんである。

ストロー笛奏者と紹介したが、

実は神谷さんの本職は、リコーダーを演奏するリコーダー奏者だ。バロック音楽の演奏に用いられる一方、小学生の音楽教材でもおなじみの、あの縦笛である。

大学在学中に、あるバロック音楽のレコードを聞いたのが、リコーダーとの出会いだった。「いい音がしていて、この楽器なんだろうかと興味を持ったのです。レコードのジャケットの裏に縦笛の写真が載ってまして、これは簡単に出来そうだと笑)。すぐ楽器店で購入し、自己流ではじめました」という。

「もともと音楽が好き」で、中

学から高校時代はブラスバンドでクラリネットを担当していた。部活で鍛えられた音楽的感覚が、バロック音楽の演奏の一翼を担うリコーダーを選ばせたのだろう。1年後には、リコーダーの専門家から個人レッスンを受けるほど傾倒しているのだ。

その後も、バロック音楽とリコーダーへの思いは深まり続けた。大学卒業後は2、3年ごとにヨーロッパへ出掛け、フランスやドイツ、ベルギーなどでリコーダーの奏法を学んでいる。

こうした修業が実り、80年以降は、バロック音楽の専門団体である日本テレマン室内管弦楽団にリコーダーのソリスト(独奏者)として参加。現在も国内外の演奏会などで活躍中だ。この間、神谷さん自身のリサイタルも10回を重ねる一方、大阪音楽大学では、教職に必要な科目や、バロック時代の音楽を実習する科目でリコーダー

リコーダー、ストロー笛奏者 神谷 徹(かみや とおる)さん

1949年、東京生まれ。1歳の時に家族で兵庫県に引っ越して以来の関西育ち。73年、京都大学理学部宇宙物理学科を卒業。在学中から傾倒していたリコーダーを学ぶため75、78、80年にヨーロッパ各地へ。80年、バロック音楽の専門団体、テレマン室内管弦楽団のメンバーに。91、92年にはドイツ、アメリカの演奏旅行に参加。また、10回のリサイタルも開催した。一方で、80年に市販のストローで作ったユニークな笛を開発。その後、ストロー笛のコンサートを開催してマスコミに取り上げられ一躍有名に。近年ではドイツ、アメリカ、中国、韓国などに招かれ演奏するなど海外でも活躍中。98年、「あたたかい心を育てる運動」第1回希望大賞を受賞。

を指導する立場でもある。

ヨーロッパで リコーダー奏法学ぶ

リコーダー奏者として活躍していた神谷さんに、意外な転機が訪れることになる。音大の学生と過ごしていた80年代初頭のある夏合宿のひとつときだった。学生数人と、自分が使ったあとのストローの先を潰し、縦笛のように鳴らしていた。「笛吹きは、暇つぶしにいろんなものを吹いて遊ぶんです」。だがピーピーと聞きづらい音が出るだけ。やがて学生はその遊びにも興味をなくし、やめてしまう。

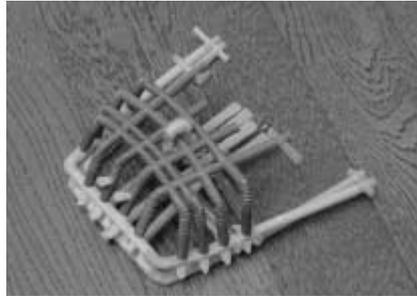
だが、神谷さんは考えた。「汚い音が出るのは自分のせいだと。だいたい管楽器は最初は汚い音が出ますし、最初出た音でその楽器を判断できないわけです。(ストローも)もっと自分が訓練を積めば、音はきっと良くなると思いました。ある種謙虚なんです、僕は(笑)」。この「謙虚」さが、人生を変えるのである。

市販のストローを買い込み、工夫と改良を始めた。指の穴を開け長さを変えながら、吹く。1ヵ月、6ヵ月、1年 - 。やがて音が良くなり、メロディーもスムーズに演奏できる楽器に成長する。

完成品の第1号は、リコーダーと同じく8つの穴を開けたストロー笛だった。工夫・改良で目指したの



「さくらさくら」の演奏中(写真提供:神谷徹さん)



は、「聞いた人が嫌がらない演奏」のできる楽器だ。

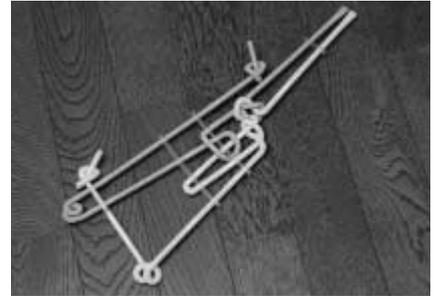
しかし、子ども向けの手作り楽器などでストロー笛はあるが、本格的な演奏のできるストロー笛となると、世界にも前例がなく、まさにパイオニアである。「逆に言うと、全て未知数だからおもしろかった」とはいうものの、なにしろストロー相手の手作りである。周囲や家族の反応…。たぶん、自宅2階の練習場が、唯一の“城”だったろう。

ストロー笛を開発 各地で感動の演奏会

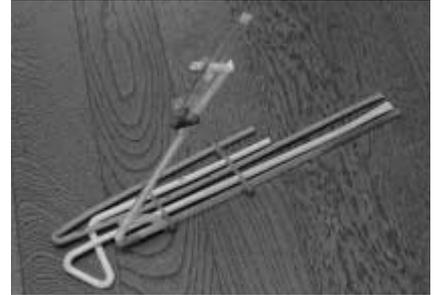
やがて、ストローの長さを調節することで、高音のソプラノから低音のバスまでの音作りに成功。長くして、穴に指が届かなくなった場合は、ストローをヘアピンのように曲げることで解決した。これに役立ったのが、節があって曲がるストローだ。「あれがなければ、僕のストロー笛演奏も実現していなかったでしょうね」。

こうして完成したストロー笛の演奏をはじめたのは、82年ごろ。当時はリコーダーのあと、余興として6、7種類を披露する程度だった。単独で演奏会が成立するようになったのは、さらに十数年後の94年以降だ。「94年は、おもしろい笛がたくさん生まれ、15種類ぐらいに増えた年なんです。それで30分程度の演奏会が可能になりました」。

ストロー笛の演奏会は、たちまち学校・学園や音楽ホール関係者の評判を呼び、マスコミの取材やテレビの出演依頼が相次ぐことになる。単に前述の、「聞く人が嫌がらない、いい音」が出るだけではない。二重奏、三重奏から四重奏までこなしてしまううえ、メロディーに合わせた笛では、楽器が動くのである。



ユニークな楽器の数々。(写真左:「ゴジラ」右:「くるみわり人形」下:「しゃぼん玉」)



たとえば、「ぞうさん」の曲ではゾウの鼻がゆらゆら揺れ、「ドラえもん」のうたでは、頭の上でタケコプターが回転する。阪神タイガースの応援歌「六甲おろし」で黒と黄色の旗が揺れるかと思えば、「シャボン玉のうた」では本物のシャボン玉が飛び出す。軽い語りと演奏、曲に合わせて動くストロー笛は、ウケにウケた。子どもも大人も笑い、感動する。

現在では、その種類も30を超え、1時間のコンサートも可能なほどだが、新作への挑戦は、今この時も続いている。「リコーダーのプロは何人もいますが、ストローは僕しかできませんから」と。

ストロー笛と物理学についての話も興味深い。「楽器というのは音楽に見えますが、物理です。ストローも、音で何をするかということころは音楽ですが、鳴る仕組みとか飛び出す仕組みなどは物理というか理科です。『さくらさくら』で演奏の最後に桜が開くのは物理ですが…。でも、これでウケてやるうということころは、音楽というより芸の世界ですね(笑)」。

5月25日、城北市民学習センターでストローコンサートが行われる(事前申込必要。詳細は電話6951-1324で)。ぜひストロー笛が奏でる、物理と音楽と芸能がドッキングしたエンターテインメントを楽しんでほしい。

(文・脇本勤/写真・高島悠介)